

避難所づくり ワークショップ in いわき

講師：せんだい防災プロジェクトチーム



ワークショップの様子



みんなのための避難所作り



テキストに掲載されている話し合いで使うイラストの一例

ステップ① 導入

—グループ分け、説明、自己紹介

参加者は仙台にちなんだ「笹かま委員会」「牛たん委員会」「ずんだ委員会」の3グループに分かれ、進行役からワークショップの説明を受けた後、グループ内で自己紹介をしました。

ステップ② ワーク1

—東日本大震災の時の経験や気づきなどを共有

東日本大震災の時の経験や気づいたこと、大変だったことを各自フセンに書き、大きな紙一枚に貼り付けながら順番に話しました。一人一人異なる震災時の状況について、互いに耳を傾けました。震災時に困ったことや大変だったことが、立場や状況によって違うことを理解し合いました。

ステップ③ ワーク2

—もし、あなたが運営委員だったら？

グループは「避難所運営委員会」、参加者はその「運営委員」という設定で、震災発生から1週間目の避難所で起こるさまざまな課題にどう対応していくかを、分かりやすいイラストを見ながら話し合いました。

「赤ちゃんの夜泣き」という課題では、避難所で赤ちゃんの夜泣きのために周囲の人たちが眠れないときどうするかを話し合いました。赤ちゃん世帯の部屋を別にする、布などで区切る、避難所の代表者から協力を依頼する、赤ちゃんと親が周囲の人たちに自己紹介をして親睦を深めるようにする、などの意見が出ました。グループ内で出し合った意見は、グループの代表者が全員の前で発表しました。

最後に、各グループでワーク2を振り返り、運営方針をキャッチフレーズのように決めて、グループごとに発表して全員で理解を深めました。

ステップ④ まとめ

ワークショップを实践して、避難所という一つのコミュニティで住人たちが円滑に生活していくためには、話し合いが大切だと学びました。みんなで負担を分け合い、特定の人にばかり負担が偏らないように配慮すべきだと話し合いました。

女性をはじめ誰もが、普段から地域のことを決定する場に参画し、日頃から積極的にまちづくりにかかわることが、いざという時の地域の力になると学びました。



せんだい防災プロジェクトチーム

「女性の視点による地域防災ワークショップ」を受講した市民と、せんだい男女共同参画財団の職員で、2013年6月にチームが結成されました。地域における防災や復興の担い手として女性の力を活かし、地域防災に多様性配慮に向けた女性の視点を反映させることを目指しています。東日本大震災の被災地としての経験を活かして作成した「仙台版防災ワークショップ みんなのための避難所作り」のプログラムを各地で実施しています。プログラムの中で、災害支援の国際基準として広く活用され、被災者の人権を守る「スフィア・プロジェクト」を紹介しています。

スフィア・プロジェクト

支援の際、多様な立場の人の人権がきちんと守られるよう、配慮すべき点について具体的に示しています。例えば、子どもや乳幼児、高齢者、妊娠している人や障がいのある人などの人権が守られるよう配慮することです。